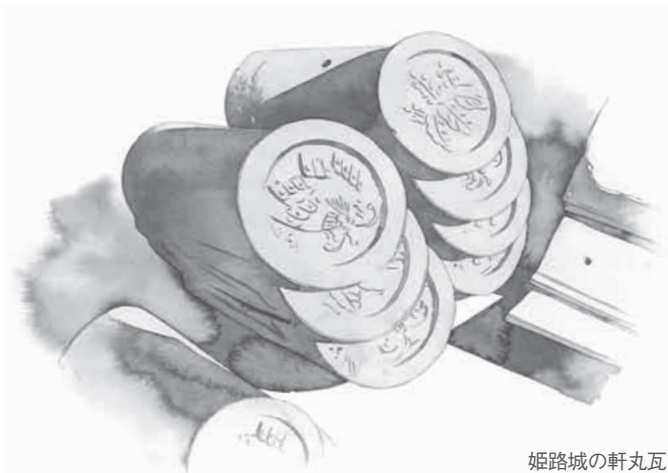


瓦職人 — 山本清一 [前編]

現在、昭和三十九（一九六四）年以來の大規模な保存修理工事が進められている、国宝・姫路城。世界文化遺産にも選ばれた優美な外観——その要となる大天守の屋根瓦補修を手がけているのが、山本瓦工業の山本清一会長である。伝統的な瓦技術の保存にも尽力する山本会長の半生を聞いた。



姫路城保存修理工場の現場にて、大天守のシンボル「鯨」のできばえをチェックする。



姫路城の軒丸瓦

山本瓦工業株式会社社長・山本清一。山本会長の日常は、朝誰よりも早く出社し、お茶を入れることから始まる。
「冬やったらストロップに火も入れて…若いもんが居眠りせんように、苦い茶飲ましてな。言いたいことはいろいろあるけど、朝はやっぱり気持ちよく送り出してやらんとな。『ケガせんと、ちゃんと帰ってこいよ』と」
納得がいかなければゼネコン相手にも一歩も引かない厳しい職人の目つきが、少しだけやさしくなった。

民家の瓦葺きから、文化財建造物の世界へ

山本清一は、昭和七（一九三二）年十一月一日、奈良県の生駒市で、八人きょうだいの四番目の子として生まれた。高等小学校を出て十四歳で家業を継ぐことを決意、民家の瓦葺き職人だった父の仕事を手伝い始めた。その後、一人前の技術を身につけるにつれて法隆寺などの歴史的建造物の屋根葺きへの思いが募り、二十一歳の時に父の元を離れ、文化財の屋根葺きを専門にしていた井上新太郎氏に改めて弟子入りした。

棧瓦葺き^{*}が基本になっている民家の屋根に対して、文化財の屋根は本瓦葺き。瓦の形も葺き方も違うため、ほとんどゼロからの再出発となったが、驚かされたのはそのことではなかった。

「親方は、それまでの職人さんとは明らかに違うやり方をする人でしたな。ちょっとした仕事でも、施工図や原寸図をちゃんと書くんです。屋根屋に限らず、職人といえば経験と勘が第一で図面なんか引かないのが当たり前の時代に。これにはびっくりしました」

山本会長の師匠・井上新太郎親方は、文化財の屋根瓦を葺く名人だっただけでなく、「熟練職人が大勢集まる文化財の屋根葺きでは、受け持った部分によってバラつきが生じないように、誰が見ても理解できる正確な図面を作って全員

^{*}棧瓦葺きは、平瓦と丸瓦を一体化させた「棧瓦」で葺く比較的簡便な葺き方で、江戸時代に考案された。本瓦葺きは、平らな「平瓦」と円筒を半分に切った形の「丸瓦」を組み合わせる伝統的な葺き方。

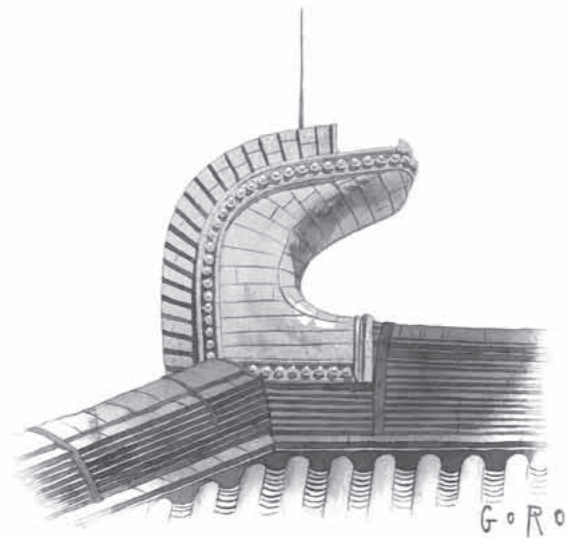


やまもと・きよかず●父、そして井上新太郎氏のもとで修業を積み、文化財建築の瓦葺き職人に。独立後、奈良県生駒市に会社を設立。さらに理想の瓦を求めて瓦製造も開始。数々の国宝・重要文化財の修復・再建に貢献し、現在は日本伝統瓦技術保存会の会長も務める。

「自分の思い通りに
屋根を葺くためには、
自分で瓦を焼くしかなかった」

元々瓦屋で瓦製造に精通していた二人の社員の手を借りつつ、天平時代や鎌倉時代の古い瓦を研究することから始めて、ついには現在の工場がある奈良県生駒郡平群町に窯を作って瓦を焼き始めた。

「実際に使えるようになったのはずっと後のことです。時間をかけて高い温度で焼く、というのを理想にしていたから、形が歪んでなかな



東大寺大仏殿の鴟尾

日本職人紀行

山本会長は、親方の元で松本城・法隆寺・瑞巖寺などを手がけたあと、昭和三十二（一九五七）年に独立。昭和三十五（一九六〇）年からは、姫路城の「昭和の大改修」にも従事した。

「当時、文化財の仕事をあちこち担当してましたが、現場から次の現場へとうまくつながらな時が大変でしたな。基本的に日雇いなので、仕事があれば給金も出ない。姫路城の時なんかは、他の仕事を断って瓦葺きが始まるのを待つ

徒弟制度から会社設立へ、
そして「瓦屋」となるまで

の意識を統一し、あたかも一人の職人が葺いたかのように仕上げなければならぬ」という当時としては革新的な考え方の持ち主であった。

「実際に仕事をする職人からすれば、上手も下手も関係なくみんながおなじように葺くというのはうれいことやない。でも、棟梁というのは、大きな仕事ほど広く全体を見なければあかん。わしも後に東大寺の大仏殿の屋根を葺く際に、棟梁としてその考えを生かさしてもらいました。何せあれだけの大きな屋根ですから、たくさんさんの職人に原寸図を見せて、その通りに誰でもできる工法を考えて段取りしました。あれをめいめいの勘でやらせたら、てんでんバラバラの汚い仕事になってしまったでしょうな」

てたのに、それが大幅に遅れて難儀しました」

「思い出すのもつらい」ほどの苦労を重ねて何とか大天守の屋根を完成させたが、職人が城の落成式や祝宴に呼ばれることはなく、まだまだ地位が軽んじられていることを痛感した。

「会社『生駒瓦清』をつくったのは昭和三十八（一九六三）年です。それまでは仕事がある時だけ呼んで働いた分の日当を払って、終わったら帰して……という繰り返しで、次にいつ仕事があるのか何の保障もない。これでは人も育たんし職人の立場もようならん。自分の下で働いてくれる若い職人をきちんと面倒見るには、個人個人で雇うよりちゃんとした組織にしよう」と

山本会長が会社を興したのは東京五輪の前年。日本は高度経済成長で空前の好景気に沸き、仕事には事欠かなかったが、その一方で効率を重視するあまり低品質の瓦が氾濫し、きちんと葺いたはずの屋根を数年後には葺き直す羽目になった。古くからやっている瓦屋に品質改善を要求しても、「屋根屋に何がわかる」と蹴された。

「結局、自分の思うように屋根を納めようと思つたら、瓦も自分で造らなあきまへんのや。何も金儲けで瓦屋を始めようというわけやない。言うこと聞いてもらえんのやったらしようがない、自分で焼こうかと。雨を吸い込んですぐに雨漏りするような瓦で国宝を葺くくらいならな」

かい瓦がでんかかった。軌道に乗るまで一、二年は失敗続きでしたな」

それでも昭和四十八（一九七三）年の法輪寺三重塔、そして同年に始まった東大寺大仏殿大修理の際などに山本瓦工業で製作した瓦を葺いた。長年の研究と試行錯誤の末、「屋根屋」が自ら焼いた瓦が文化財で使われるまでになったのである。

（後編に続く）



左/昭和48(1973)年に始まった東大寺大仏殿の修理現場で、屋根最上部にある大棟の原寸図を作成する若き日の山本会長。右/正確な図面を書くことの大切さは、師から学んだ重要な教訓の一つ。

※「昭和の大改修」は昭和31年から昭和39年まで行われた。